

どんどん焼き

竹、もみの木、^{わら}藁などで仮小屋を作り、子どもたちが、1月14日^{*}に各家庭をまわって集めた正月の松飾りなどをその日の夜か1月15日に燃やす行事です。松飾りといっしょに「まゆだま」と呼ばれる^{だんご}団子をもらい、これをその火であぶって食べます。この団子を食べるとかぜをひかないといわれています。

※最近では、1月の第2土曜日などと地域で決めて行われています。



まゆだまをあぶる子どもたち
(平成18年鹿沼市 県立博物館提供)

～とちぎ人の想い～

私の地区では、毎年1月15日前後の土日を利用して田んぼで行います。子どもたちが地区内の正月飾りを集めて回り、育成会の大人が軽トラックに積んでいきます。子どもが来た家では、子どもたちの代表にお年玉を渡します。育成会、婦人会、^{ちやうじゆ}長寿会、消防団、自治会が分担して行事を支えています。地域の人がつながって行われる恒例行事です。

<どんどん焼きの説明>

正月三^{さん}が日^{にち}を大正月というのに対して、1月15日を中心とした3日間を小正月といい、^{あくえき}悪疫・^{やくじん}厄神の侵入を^{しんにゆう}防ぎ、^ご五穀豊穰、^{こさず}子授けを^{いの}祈るなど、様々な行事が行われています。どんどん焼きは、小正月の代表的な行事の一つであり、全国的には左義長(さぎちょう)とも呼ばれています。

^{こよみ}暦が^{こよみ}発達する前は、満月が一番目立つ日であり、この満月を中心に重要な行事を行っていました。そもそも、どんどん焼きが行われる小正月や、夏のお盆、十五夜は満月の日の行事でした。

県内では、古くは「トリヤキ」、県東地方では「ハーホイ」、日光では「ドーロクジン」などと呼ばれていました。